

ニホンミツバチの自然群とその生活 (3) —枚方市における分布と生活—

菅原 道夫, 日下部 俊一

ニホンミツバチは伝統的な養蜂によって飼育されてきた。明治以降、外国から導入されたセイヨウミツバチによる養蜂が盛んになるとその生活が競合するため、ニホンミツバチの群れが減少した。さらに近年、ニホンミツバチの養蜂が行なわれていた山間地の過疎化に伴ってその種の絶滅さえも懸念された(渡辺・渡辺, 1974; 岡田, 1988)。ところが最近、市街地でその生活が知られ、しかも数が増加していることが推測されている(丹羽, 1988; 菅原, 1996; 1997; 1998; 吉田, 1998; 佐々木, 1999)。

市街地のニホンミツバチは、養蜂の対象として飼育されているのではなく、有害昆虫として駆除されている。セイヨウミツバチとの区別もされていないので、市街地にどれほどのニホンミツバチが生活しているのかは明らかではない。

ここでは、枚方市役所に通報のあった情報をもとに観察・捕獲・駆除したニホンミツバチの群れ、巣の存在からその分布と生活を考える。

枚方市におけるミツバチ対策

他の衛生昆虫(カ, ハエ, ダニ)の発生と同様に、ハチ類の通報も市民から市役所環境対策部衛生総務課に入る。通報の内容を詳しく聞き取りその内容によって対応が検討される。特に、市民に危害が加わると考えられるオオスズメバチの巣の存在の通報があると可能なかぎり迅速に駆除係を派遣して巣を駆除する(1999年は、2個の巣を駆除。例年ほぼ同数)。アシナガバチの巣の通報に対しては、電話を通して駆除の方法を市民に教え、多くの場合職員の派遣はしない。ミツバチの巣の場合、職員が駆除できる場所に営巣している場合は駆除する。屋根

裏に営巣しているが天井板がはずせない例のように、特別な作業を伴う場合は業者を紹介している。ミツバチの飛来群(分蜂群, 逃亡群)が出現したという情報に対しては、ハチが蜂球を形成するまで観察し、さらに静かに見守りハチの逃亡を待ってもらっていた。特に市民がハチに恐怖心を持っていたり、恐怖のあまりハチの群に殺虫剤を散布し、そのためハチが興奮して市民を刺しているような場合は、駆除係を派遣し、群を掃除機で吸引し駆除していた。1998年からは、飛来群が出現したら可能なかぎり出向き群の観察と捕獲をしている。捕獲箱を用意しその中にほうきで掃き入れる。作業時間は数10秒、掃除機で吸引していた場合と比較しても速くすみ、作業をする職員からも好評である。

他市での状況と同様、行政改革の動きが枚方市でもみられ職員の削減と同時に作業項目の見直しが行なわれている。ハチの巣の駆除は、一般的に業者委託になろうとしている。そんな状況のなかでは分布調査はたいへん困難になると思われる。

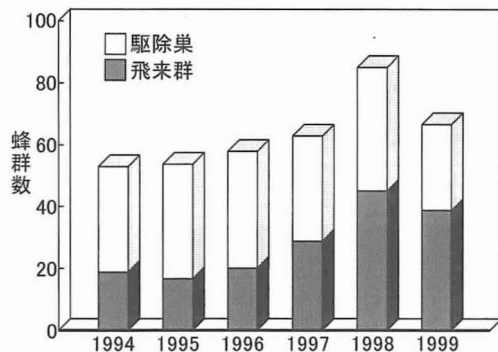


図1 枚方市のミツバチ通報の総数

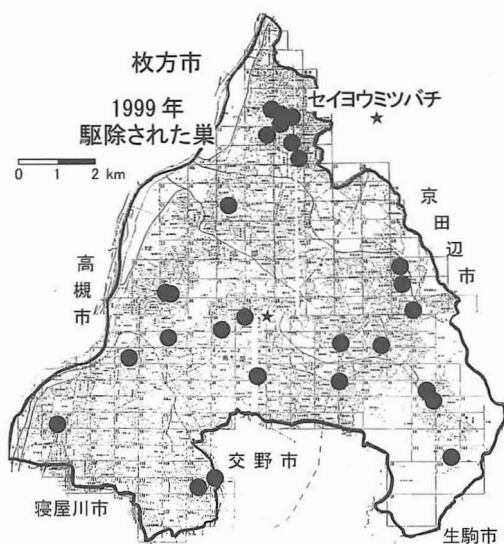


図2 1999年に駆除された巣

ニホンミツバチの分布・生息

図1は、1994年から1999年の間に市民から通報のあったミツバチの情報である。巣は、職員あるいは業者によって駆除された。ハチの群は、多くが駆除され、逃亡した群も含まれる。1998年以降は、大部分が捕獲され、駆除された群、逃亡した群が含まれる。1997年までは、セイヨウミツバチとニホンミツバチの区別がされずに記録されていた。1998年は、セイヨウミツバチの飛来群が1、1999年は、巣が1、飛来群が2であった。この傾向は、ここ数年変わっていない。各年度の総数に占めるセイヨウミツバチの数は、3を上回らないと思われる。飛

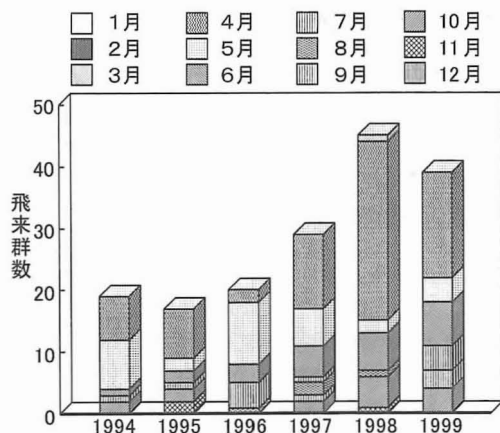


図3 枚方市のミツバチ飛来群

来群も巣もその大部分はニホンミツバチである。

図2は、1999年の駆除が枚方市のどこで行なわれたかを地図に示した。ほぼ市内の全域にみられた。ニホンミツバチが市内の全域で分布に差がなく生活していると考えられる。

図3は飛来群の集計である。ここ数年増加の傾向がみられる。特に、春が早く来た1998年は、4月の飛来数が多い。対照的に1996年は4月より5月の飛来数が多くなっている。図4は、飛来群の数を月別に示したものである。これによると飛来群には2つの極大がみられ4月の極大は分蜂群、10月の極大は逃亡群と考えられる。しかし、1996年と1998年を別々にグラフ化(図5)してみると分蜂群の極大は、1998年は4月と6月の2つに別れる。これは、同じ巣から2回の分蜂が起こっている可能性を示唆するものである。事実、枚方市上野、殿山第一小学校に、1999年4月20日と6月21日の2回飛来群が現われた。2群とも観察後捕獲する。いずれも隣接する忠魂碑(数年来、基礎石の間に巣が存続、駆除できずに放置)からの分蜂群と考えられ、年に2回の分蜂があることを支持するものである。

1999年の飛来群を10月の群れを逃亡群、他を分蜂群として地図上に示したのが図6である。枚方市の東部、北部には森林や林が残っている。さらに西南部には大きな公園があり木が茂った部分がある。これらに隣接する住宅地で10月にハチの群れがみられている。これらの群は、この付近にオオスズメバチの巣が存在し、オオスズメバチにニホンミツバチが攻撃さ

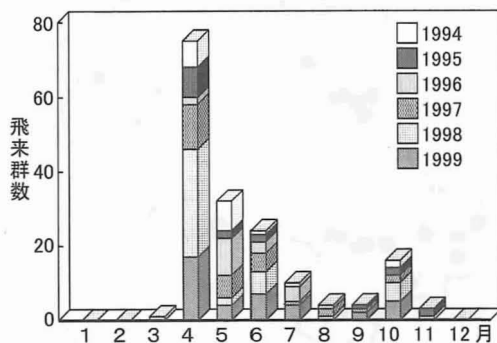


図4 枚方市のミツバチ飛来群(月別集計)

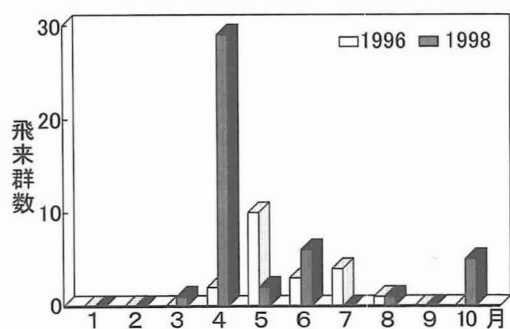


図5 1996年と1998年の月別飛来数の比較
れ逃亡した群と考えられる。

枚方市におけるニホンミツバチの生活

毎年駆除される数が、群と巣を合わせほぼ60個。駆除できない場所にある巣、継続して観察している巣が現在十数個。生息密度は、65 km²の枚方市で1 km²に1個はあると考えられる。

1999年、枚方市磯島、磯島高校の校内で飼育している群にも、枚方市楠葉朝日町、ブロックの隙間に作られた巣(菅原, 1998)にもオオスズメバチの攻撃がなかった。市内の中心部に作られた多くの巣でも同じようにオオスズメバチの攻撃がないものと考えられる。市内の中心部では、天敵であるオオスズメバチの攻撃を受けずに多くのハチは生活している。

ニホンミツバチの分蜂は、春から初夏に起こ

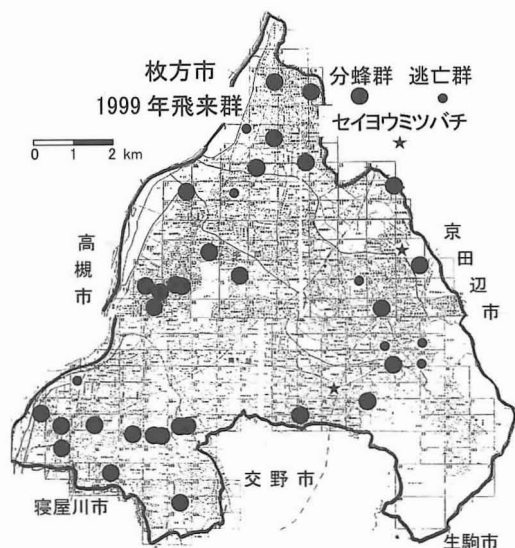


図6 1999年の飛来群

り、一つの群から2~3群の新しい群が誕生する(佐々木, 1999)。しかし、ニホンミツバチと同じくトウヨウミツバチとして分類されるスリランカのトウヨウミツバチは、1年に2回分蜂することが知られている(Koeniger, 1995)。最近、市街地で飼育されているニホンミツバチの群が、1年に2回分蜂することを観察した(菅原, 2000)。今までニホンミツバチが生息していた山間地と比べ、市街地の冬の最低気温はたいへん高い、加えて蜜源植物がみられなくなる冬期にも民家の庭にはビワ、サザンカ、ウメといったハチが訪花する植物が多くある。これらの条件を踏まえ、市街地のニホンミツバチは年に2回の分蜂時期を持ち群を増やし、冬期にも育児をし(菅原未発表)その分布を拡げていると考えられる。

謝辞

ミツバチの観察・捕獲に共に協力して下さった、衛生総務課の職員の皆様に感謝します。(菅原: 〒573-1187 枚方市磯島元町20-1 大阪府立磯島高校, 日下部: 〒573-0026 枚方市朝日丘町2-17 枚方市環境対策部衛生総務課)

引用文献

- Koeniger, N. 1995. *IN The Asiatic Hive Bee* (Kevan, P.G. ed.). pp.29-39.
 丹羽新太郎. 1988. ミツバチ科学 17(2): 71-76.
 岡田一次. 1990. ニホンミツバチ誌. 玉川大学出版部, 東京. 86 pp.
 佐々木正己. 1999. ニホンミツバチ—北限の *Apis cerana*—. 海游舎, 東京. 192 pp.
 菅原道夫. 1996. 遺伝 50(6): 72-74.
 菅原道夫. 1997. ミツバチ科学 18(1): 17-20.
 菅原道夫. 1998. ミツバチ科学 19(1): 37-41.
 菅原道夫. 2000. ミツバチ科学 21(1): 35-39.
 吉田忠晴. 1998. ミツバチ科学 19(1): 27-36.
 渡辺寛, 渡辺孝. 1974. 近代養蜂. 日本養蜂振興会, 岐阜. 726 pp.

SUGAHARA, MICHIO* and SHUN-ICHI KUSAKABE. Feral colonies of Japanese honeybee, *Apis cerana japonica* and their life history. 3. Habitat and life cycle. *Honeybee Science* (2000)21(3):122-124. Ishojima High School, 21-1, Isojima-motomachi, Hirakata, Osaka, 573-1187 Japan (*correspondence).